

●イエローグリーンリボンをご存じでしょうか

佐世保市健康づくり課の取り組み

加藤一晴

こどもをタバコから守る会・代表
浜名医師会・理事

モノ申せぬ80%の 非喫煙者 (silent majority)

わが国の喫煙率は19・5% (2010年11月調査) まで減少し、それ以外は吸わない人になりました。男性では、特に60歳以降の高齢者、20〜40代の若年〜中堅層が減って、女性も高齢者は同じです。一方で50歳以下、特に20〜30代の喫煙率が微増しています。実際、コンビニレジ前には、百花繚乱の如くアクセサリー付きのタバコが並び、減りつつある喫煙者に待ったをかけているようです。

わが国はWHO主導の多国間条約 (たばこ規制枠組み条約FCTC) に批准したものの、国家による法規

制のない数少ない国です。北欧・フィンランドは喫煙率が低いのですが、喫煙行為撲滅を目指しており、2028年には達成できそうです。理由は「人体に有害な産業は撲滅するのは国家としての責務」とのこと。国民500万人の健康面に配慮したカタチでしょうか。

世界中でタバコ離れが起きていますが、国家による喫煙擁護論調がまかり通るのは、わが国に見られる特徴です。残念ながら寡黙な非喫煙者から意見が出ることは稀です。

積極的な20%の 喫煙推進派 (noisy minority)

しかし、20%の喫煙推進派は、根深くしたたかなアクションを行なっ

ています。特に業界団体などは種々のロビー活動を行ない、喫煙率低下に歯止めを掛けようと必死です。また豊富な資金を背後に行政・財界組織に組み入り、マスコミを懐柔し、世界と乖離した世論を形成します。地方自治体は国と折半した形で交付税があるので、および腰スタンスになるでしょう。そのため、本音とは裏腹に、タバコ関連団体の意見を尊重する自治体が後を絶ちません。当然、族議員の暗躍もあり、この問題を深刻なものにしています。喫煙率が高く影響力のある方々の意見には、80%の非喫煙者 (silent majority) は従わざるを得ないのです。

あらゆる手段を講じて、禁煙施策を潰しに掛かりますが、その姿を冷

ややかに有権者は見ているのです。
しかし高齢化、TASPO導入などで小売店はその数を減らし、平成23年度のデータによれば、タバコ耕作者の廃作希望は、1万801軒のうち4257軒にまで増加しています。つまりタバコ事業の斜陽化が叫ばれているのです。

永田町の慣例と霞ヶ関の掟

民主党政権になり、タバコ規制にシフトするかと思いましたが、そう



実物は、
天地3cmの
バッジ。

●イエローグリーンリボンとは
このリボンは、「たばこの煙を吸いたくない」という気持ちをさりげなく伝えるためのものです。市民のアイデアで生まれ、佐世保市独自の取り組みとして普及活動を行なっています。
このリボンを見たら、近くでたばこを吸わないでください。受動喫煙の防止について考えてみてください。

佐世保市役所保健福祉部健康づくり課
TEL:0956-24-1111 FAX:0956-24-1346
<http://www.city.sasebo.nagasaki.jp/www/contents/1211275594274/index.html>

ではありません。東日本大震災のあとに、国有財産の売却が検討され、JT株を手放すことも検討かと報道されましたが、結局実行されません。現在、マスコミやコンビニや各専門店は、必死に販売促進キャンペーンを行なっていますが、健康への懸念とタバコを売ることに対する批判もあり、消えていく運命でしょう。今のうちに、補助金を出して転業支援したほうがいいのですが、我欲と利権と既得権益に塗れた人たちの心には届かず、民主党の閣議決定「た

ばこ事業法の廃止」にも平然と反抗しているのです。

国有企業が国民の健康を、命を害する製品を独占的に製造、販売することは異常ですが、非喫煙者(silent majority)は何も言えません。内心「お上のすることに間違いはない」言っても変わらないだろう。などの諦めの境地なのでしようが、ここに来て素晴らしい取り組みが見つかりました。

佐世保市健康づくり課で 生まれたアイデア

長崎県佐世保市では、平成13年度、健康増進計画「けんこうシッパさせほ21」公募委員や関係者で構成する4つの市民作業班(健康増進班、嗜好班、歯科班、疾病予防班)が設置されました。

その中で「非喫煙者が喫煙者と同じ空間にいと、自分の意思とは無関係にタバコの煙を吸わされてしまう。受動喫煙から身を守るにはどうしたら良いか」「周囲との関係を良好に保ちながら受動喫煙を防止でき

る方法はないか」などの意見が出され、「非喫煙者の意思表示バッジ」のアイデアが生まれたのです。

注目すべきは住民からの声を吸上げ、健康づくり課が企画・製品化したことです。現在、様々な自治体で事業仕分けが行なわれていますが、佐世保市政からのアイデアではなく、地域住民の意見をまとめたことに意義があります。これは民意そのものであり、仕分け対象に成り得ません。

リボン啓発運動には20種類以上あり、代表的なものでは赤がHIV感染、ピンクは乳がん、そして肺がんは透明です。実は同じように、カナダでも受動喫煙防止活動の一環としたブルーリボン運動が1999年から行なわれているようです。

イエローグリーンリボン

手にとってみれば、綺麗な黄緑色で非常に目立ちます。大きさもそこで、これを襟につければ、「何のバッジなの？」と関心を持たれ、

話題が拡がっていくことでしよう。

「受動喫煙を避けるのは大切なことだね」

「いつも息苦しい思いをしているから……」

「どこで手に入るの？」

「佐世保市で……」

「それじゃ注文しようかな……」

このようにイエローグリーンリボンの主旨に、賛同する人も出てくるかも知れません。とにかくその場の雰囲気は、和むので大変望ましいものになります。

こうして80%を占めるsilent majorityは、口を開かずして、リボンに語らせることができます。特に複数でリボンをつけて飲食店に入ったときに実感するはずです。きっと「我々がタバコの煙が嫌なのを解りますか？」の雰囲気醸し出し、案内外すんなり行くかも知れません。一般的な禁煙表示には反目する人でも、イエローグリーンリボンには「仕方ないな……」と納得します。100%上手くいく訳ではないけれど、相手に考えさせることができる

のです。

まさに敵対することなく、無煙環境が得られやすいのです。

声高に叫ぶ業界関連団体

20%の喫煙推進派は、社会的影響が大きいのは事実です。一見、彼らからは強いメッセージ情報が出ていますが、よく考えれば説得力もなく必然性も希薄です。議員諸氏の目論見や行政関係者の期待とは裏腹に、80%を占める非喫煙者(silent majority)は、冷静に推移を眺めています。

このイエローグリーンリボンは、寡黙ながら雄弁に語りかけてくれます。議員諸氏や行政担当者は、80%の票田を無視できないことを、大阪や名古屋の政変から知るべきでしょう。

『ランセット』(英国の週刊医学誌)の日本特集号は、国民皆保険達成から50年を取り上げています。しかし、このままの無策状態が続けば、長寿世界一の日本に警鐘が出ると報告し

ています。3人のうち1人ががんで亡くなります。最大の原因である喫煙を存続させることは、国家の危機ではないでしょうか。

利権や既得権益と対峙できるよう

●一教授のつぶやき

東大生き残り作戦で、

山川いたる 埼玉県幸手市

東大は、昨年4月に副学長を長として、学内関係者6人で「入学時期の在り方に関する懇談会」を設置した。入学時期を秋に移行した場合の影響を検討するためである。

大学の入学時期は、文部科学省令で4月入学が原則とされて来たが、2008年度から、学長の判断で決められるように変更されたのである。

昨年7月1日の日経新聞のトップに「東大、秋入学に移行検討」の記事が出た。今年1月半ばに懇談会は、学部の春入学を廃止し、国際標準という秋入学への全面移行を求める中間報告をまとめた。入学試験は現行

な無私の政治家を育み、ひとりひとりが毅然としたスタンスでいるには、高い志を持たなくてははいけません。そんな時、勇気を与えてくれるのは、さり気なく付けた襟元のイエ

日本人学生を見捨てるのは許せない

通り春に行なうという。

秋入学の、大学にとつての利点は、①留学生の増加が期待できる。

②海外の大学と教育・研究の協力関係を結びやすくなる。

ことである。

それに比べれば、学生の利点は小さい。高校卒業後の半年間自由な時間が手に入り、卒業も9月なので、就職する4月までの半年間で、社会的見聞を広めることができるくらいであるが、これは1年間浪人するのと同じだから、利点とは言えない。秋入学にする真の理由は、優秀な外国（アジア）の学生を獲るためではないのか。日本では、近年の大学

ローグリーンリボンです。ワンコイン（500円）で幸せのオーラに包まれるでしょう。さあ、あなたもイエローグリーンリボンを付けてみませんか？

入学生の学力低下は非常に憂慮される状況である。大学入学後に基礎学力を付けさせないと大学の講義に付いて来れない学生が増えている。東大といえども同じ悩みをもっている。このままでは、大学のレベルを保持することも難しいという危機感から、日本人学生よりもやる気のある優秀な外国人学生を獲って、国際化の波に乗ると共に、学力向上も手に入れようという戦略であろう。

日本人学生のやる気と学力の向上策を真剣に考えるほうが先決だ。東大教授陣が日本の若者を育てていくと思わず、日本国民の血税で生かされている認識が無いのが悔しい。